

御喜美江マスタークラスが3月27日、御茶の水のヴォーリーズホールで開かれた。

注目のヤンネ・ラットウアは2曲演奏、いずれも大きな感動をよんだ。一曲目「深き淵より」(クパイドゥリーナ)は、1976年?に作曲されたアコーディオンのためのオリジナル作品で、この楽器の左右すべての音域、ペローの限界、リード音と風の境い目、エアバルブのみの風の音、ペローシェイクやピヴラート、音を半音ほどずり下げていくポルタメント的な特殊効果など、アコーディオンの機能をすべて駆使し、限界に挑戦した演奏であった。そこで感じたことは、アコーディオンはまさに風が奏でる楽器であるということだ。

マスタークラスの受講生には、ドイツ留学中の若い二人の女性も参加し、それぞれに成長ぶりを披露してくれた。クロマチックアコーディオンに切り換えてまだ数週間という、この春ドイツの音大アコーディオン科入学の大田智美さん(中山先生の一人娘)、そして同大学院に入学した柴崎和圭さん(松永先生の弟子)。和圭ちゃんが弾いた「ミートボールがフェンスをこえて飛んでくる」は描写的な音楽で、当日参加した子供たちにも興味が尽きない面白みがあった楽しんでた。御喜美江さんの、生徒にイメージを分かりやすく与えて指導していくレッスン法には、あらためて新鮮な感動を覚えた。

この25年くらい、この間のアコーディオンの出来事には様々な想いが膨らむ。

御喜さんがドイツ留学を果たした頃、私たちはうたごえの伴奏を主体とした活動を進めていた。その頃、我々のサイドに独奏という領域はまだ発展していなかった。そんな中で、御喜さんの国際コンテスト優勝の報は衝撃的なニュースであった。80年代に入って、アコーディオン合奏の整備とオーケストラ的色彩感とを取り組んだり、音楽センターオーディションが始まった。10年前にようやく関東アコーディオンコンクールが誕生、とくに独奏のレベルが大きく高まった。90年代に入って御喜美江公開レッスンを実施、御喜さんとの交流が始まり、彼女の紹介と協力でトホランピ(フィンランド)での研修・視察。智美、和圭の二人ともそこに参加した。ヤンネ・ラットウアと知り合ったのもトホランピであった。これは我々の国際交流の第一歩であった。以後、ラース・ホルムさんを日本によびセミナー開催。

一方、94年にJAAが生まれ、アコーディオン活性化の大衆的基盤が生まれ、コンクールも開始。今回、「第二回JAAコンテスト」には、国際的に活躍するシュテファン・フツソングが審査員として参加する。2月の「関東アコーディオンフェスティバル」も成功し、新たな段階を迎えた。

思えば、この世紀末、99年は、私たちの日本でのアコーディオンの大衆的な器楽運動と御喜美江さんを始めとする国際的な奏者たちとのドッキングを果たし、それが大きな流れとなった歴史的な年となった。